

街の 灯り 物語

ルウエーの小さな街・リレハンメル。一九九四年二月、オリンピックキャスターとしての初仕事がこの街で待っていた。

首都オスロから北へ約一三五km。取材スタッフとバスで街に入ったのは夜更けだった。街の真ん中を川が流れ、両側の丘にお菓子でつくったような小さな家々がオレンジ色の灯りを纏って点在し、見上げると冬の澄んだ星空が広がって――まるでクリスマスカードの絵柄のような街並みに、私はすっかり魅了された。

人口僅か二万三千人のこの街の人々は、ノルディックスキーをはじめ冬のスポーツを自ら楽しんできた。だからオリンピックピックも、近隣のおじいちゃん、おばあちゃんがボラントイアで支えるという手づくり感いっぱいの素敵な祭典だった。

長い会期中、私たちは会場以外では町外れのメディアセンターにずっと詰めていたが、ある日、「たまには街に出てみよう」と、スタッフと一緒に出かけた。繁華街なんていうものではなく、メインストリートの両脇に民家やレストランが並んでいる程度。ちょうど夕食時だったが、通りを歩いていると、どの家もカーテンを開けている。家族が食

事をしていたり、ソファで寛いでいたり、子供たちが遊んでいる様子が、見るともなく全部見えてしまう。

「なぜみんなカーテンを開けているのだろう?」。不思議に思い地元のコーディネーターに訊くと、「これはこの街の昔からの習慣です」。日本のようにどこにでも街灯があり煌々と照らしてくれるわけじゃない。メインストリートといっても街灯がぼつんぼつとあるだけで、歩道も車道もアイスバーン。だから外を歩く人が滑って転ばないよう、カーテンを開けて灯りを漏らし、足元を照らしてあげるのが、街の習慣だと。

当時日本はバブル崩壊後の低迷期で、どんどん内に閉じこもった時期。そんなときにカーテンを開けて自分たちの灯りを外の人に分けるといって、人としての生き方、街の、国のあり方――自分のことだけで、なかなか周りに目を向けられず配慮ができない経済大国・日本が失った部分をこの街に見た気がした。

人のつながりが希薄になるなか、リレハンメルの灯りは人の温かみであり、少しでも周りを気遣える暮らし方の象徴として、記憶に残った。

灯りは決して当たり前にあるものではない。以前、原子力発電所のある町取材したとき、地元の人に「都会の人は電気を水や空気と同じに思っているかもしれないが……」と言われた。同じ日本の中で電気の生産地と消費地で大きな意識の乖離がある。どうやって生み出され、どういう人たちを経て届いた灯りなのか? 多くの人々の何とかが届きたいという思いに気づきたい。そしてほんの少しでも灯りのお裾分けができる、そんな暮らし方を私はしたい。

翠

道行く人の足元を照らす、 家々の灯り

草野満代

キャスター

くさの みつよ キャスター
1967年岐阜県生まれ。津田塾大学学芸学部数学科卒。NHK入局、「モーニングワイド」やスポーツ番組キャスター、「紅白歌合戦」総合司会などを経て、97年退局。のちTBS「筑紫哲也NEWS23」キャスターなどを務め、現在、テレビ東京「L4you」メインキャスター。環境省地球いきもの応援団、総務省年金業務監視委員会委員なども務める。

